

「四つん這いの母（前編）」

—2 稿—

2025/5/19

雨森 れに

〈人物表〉

木村 吉亜よしあ

(10) 母親を知らない子供

木村 徹とほる

(33) 吉亜の父親

野沢 由紀子ゆきこ

(36) 住み込み家政婦。勤続12年

1. 木村家・リビング（朝）

整理整頓された無機質な霧囲気のLDK。
しかし、豪華なツリーとクリスマスの装飾が異質に輝いている。

ツリーの下に座る木村吉亜（10）。
大小さまざま
なプレゼント箱に囲まれている。

吉亜の写真を撮っている木村徹（33）。

徹 「次は開けた様子。わんぱくな感じで」

吉亜が大きい箱を手取る。

一瞬、徹の顔を見てから、勢いよく包装紙を破る。

徹 「そうだ。そう」

徹が淡々と連写していく。

その様子をドアの隙間から見ている野沢由紀子（36）。

2. 木村家・廊下（朝）

室内の様子を見ながら、不安そうに爪を噛む。

長袖で隠れていた手首が露になり、赤く細長い痣が見える。

3. 木村家・リビング（朝）

吉亜が乱暴に箱を開ける。中に入っていたのは犬型ロボット。チープな子供向けのオモチャで、一緒に充電器、首輪とリードが入っている。

吉亜が悲しそうな顔をする。

徹 「おい。その顔はなんだよ」

徹がカメラから顔を離す。

吉亜 「……本物がよかったなって」

徹 「喘息持ちに？」

吉亜 「ご、ごめんなさい！」

吉亜、徹の怒りを感じ、動揺する。
箱が手から落ちる。

ロボットが床に転がり、徹の足元に。
徹が大きな溜め息をつく。

そして、力を込めてロボットを蹴る。

ロボットはツリーにぶつかり、ツリーが倒れる。

吉亜が身を縮こまらせる。

徹は煽るように顔を近づけて、

徹 「俺だってホンモノが欲しかったよ」

吉亜は恐怖で過呼吸のような息遣いになっていく。

4.

木村家・廊下（朝）

吉亜と呼応するような荒い息遣い。

野沢は、何度もドアノブに手をかけては引つ込める。

吉亜を助けたいが、徹が恐ろしい。

5.

木村家・リビング（朝）

徹 「野沢ア！」

徹は、いるのを知っていたかのように野沢を呼ぶ。

ドアが開き、冷静を装った野沢が入ってくる。

吉亜は救いを乞うように野沢を見る。

しかし、野沢は吉亜と目を合わせない。

徹がツリーを顎で指し示す。

野沢 「かしこまりました」

野沢、ツリーへ向かう。

徹はツリーから数歩離れたソファアへ。

どかりと座って、カメラを乱暴に置く。

徹 「血統書付きだけがホンモノだよ。なあ、野沢」

野沢は吉亜をちらりと見て、すぐに目を逸らす。

野沢 「（小声で）徹様は、懐が深いですね」

吉亜、目を見開く。

野沢がツリーを戻し、葉が吉亜に降る。

徹 「かわいければ、雑種なりに自慢できるはずだったんだけ

どなあ」

吉亜はツリーを見てから、野沢、そして徹を見る。

徹の目は冷たく、吉亜を睨んでいる。

耐えられずリビングを飛び出す吉亜。

徹は鼻で笑う。

徹 「由紀子、来いよ」

野沢、おそろおそろ徹の横に座る。

徹が野沢を引き寄せて、

徹 「かわいくなる方法、教えてやれば？」

と、体をまさぐり始める。

野沢は耐えるような表情で、徹を受け入れる。

洋服が捲れ、腹部が露出する。新旧様々な細長い痣

が現れる。すべて鞭の痣である。

6. 木村家・吉亜の部屋（昼）

リビング同様、整えられた部屋。すべてが几帳面に並び、子供らしさがない。

吉亜は、学習机に座り、絵を描いている。

すでに何枚か完成していて、そのどれもが体に欠損のある犬が描かれている。

吉亜が軽い咳をする。

引き出しを開け、薬を取り出す。

袖机の上にあるコップを取ろうとして、水がないことに気づく。

7. 木村家・廊下（昼）

コップを手にした吉亜。

リビングへのドアを開けようとする。

が、室内から徹の笑い声が聞こえ、手を止める。

ドアを薄く開け、室内を覗く。

8. 木村家・リビング（昼）

野沢が下着姿で四つん這いになっている。全身に広がる痣が痛々しい。

徹により、背中に鞭が振り下ろされる。

鞭声とともに、うめく野沢。

徹の下品な笑い声が止まらない。

9. 木村家・廊下（昼）

吉亜は驚きつつ、目が離せない。
次第に口元には笑みが――。

10. 木村家・吉亜の部屋（夕）

ドアのノック音。

野沢の声「吉亜さん。入ってもいいですか」

吉亜「うん」

野沢が箱を持って入ってくる。中身は犬型ロボットのセット。

吉亜は箱の中身に気づいて、

吉亜「これ、持ってきたんだ」

野沢「徹様からのものですし、ね」

吉亜「（責めるような目で）野沢さんって、いつもパパの味方」
野沢の表情がこわばる。

吉亜は野沢の手から箱を奪い、

吉亜「でも、おれもパパが怖いから一緒だよね」

野沢「申し訳ございません……」

吉亜「野沢さんはさ、血統書つき？」

野沢「え？」

吉亜がベッドに箱を置き、その隣に腰掛ける。

吉亜「どういう人が血統書あるのかなって」

野沢「吉亜さん。人間に、そんなものないんです」

野沢が、膝について吉亜の手を握る。

戸惑う吉亜。しかし、すぐに振り払う。

吉亜「あるよ。あるって言うってたもん。そうやってすぐ子ども扱いするんだから」

野沢「吉亜さん……」

吉亜「もう行ってよ」

野沢は仕方なさそうに、ドアへ向かう。

途中、学習机にある犬の絵に気づく。全身傷だらけの犬が散歩している絵だった。

吉亜が、野沢の視線の先にあるものに気づく。

吉亜「やっぱ待って」

野沢が不思議そうに振り返る。

吉亜 「おれは、大型犬がよかったんだよ」

野沢は、突拍子もない発言に困惑する。

野沢 「なんでですか？」

吉亜 「小さいとパパが殺しちやいそうじゃん」

野沢が言葉に詰まる。暗にありえるというように。

吉亜 「でしょ？ ねえ、犬を飼うってどんな感じ？」

吉亜が箱の中身を覗く。

野沢 「私は喘息があるので……」

吉亜、箱から首輪を取り出し、

吉亜 「そっか。おれと同じって言ってたもんね」

リードをつける。

吉亜 「おれ、本物じゃなくてもいい。我慢できるよ」

につこりと笑い、首輪を差し出す。

吉亜 「野沢さんなら死ななそうだし。パパだけじゃなくて、お

れにもやって。いいでしょ？」

野沢が驚愕の表情を浮かべ、一步、後退る。

つづく